

---

# びっくりサンタと眠れなかった夜

装備

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

びっくりサンタと眠れなかった夜

### 【コード】

N3352B

### 【作者名】

装備

### 【あらすじ】

クリスマスの夜。うとうと眠りかけたエルの前に現れたのは・・・  
御定番のサンタだった。

(前書き)

クリスマスの夜に、ぱつと思いついて二時間ほど書き上げた短編。初のギャグテンポですから、受けなくても一応笑ってください。

びっくりサンタと眠れなかった夜

驚愕の出来事って言うのは、夢とみなしてしまつのかもしいない。  
・  
・  
・  
というわけで、

「・・・」

真つ暗な部屋の中で、布団にこもる僕。エル・ローテル

現在就寝時間の十二時。早い気も遅い気もするけど、僕にとつてはこの時間が妥当だ。

ぬくぬくと温まる布団の中で、うとうとと眠り始め・・・やがて・  
・夢の・・・なか・・・に・・・?  
・・・・ん?

何だろう?目の前に大きな物体がある。

あんなもの置いたっけな?・・・暗いからよく見えない・・・

・・・

・・・

・・・

「・・・誰?」

何でこんなことを聞いたんだろう、僕

人だと限らな

「サンタデース!」

その物体は大声で・・・え?

「うそオん!」

慌てて電気をつけた目の前には、真つ赤な服に白髭付きの巨大なおっさんがいた。

どういうわけだか、僕の目の前にはサンタクロースがいるらしい。と言うかこれはサンタと認めていいのだろうか。

何かを間違えたような赤白い（ほぼピンクの）服に、明らかな付け髭。何故か正座はしていながらも、巨体 とも言えるが如く僕の座高ははるかに超える、ざっと二メートル半だろうか……。

「さあてこの不審者をどうするか」

「マジデスカ!？」

やはり通報すべきなのだろうか。この状況は。

家宅侵入罪と言うか何と言うか……

うーん……

「貴方は誰？」

しかたないので、まずは事情聴取である。

「私ハサンタデース！」

……

「ええと、本当ですか？」

「ホントデース」

……

「じゃあ、この家に来た理由を言ってください」

「モチロン！子供たちニプレゼントヲ」

「通報するか」

「エエ!？」

うそ臭い。というか嘘だろう。

このサンタは偽だ。うんそうだ。

「信ジテクダサーイ！」

「やかましい」

「エエ!？」

ん？さてよ

「サンタクローズって事は、プレゼントがあるんだよね？」

「ソウデース！ヨク気付イテクレマシタNEE」

……喋り方どうにかなんないかな。

「なりまーす！」

「あっそう」



「ただ柄が違うだけのメガネじゃん！」

「ええ！？度も違いますよ！」

反論すべきところが違うだろ。と思ったが、ちょっとこれは言わない事にする。

つか、このサンタは「エル君が欲しいのはメガネ」というのに固定しているらしい。

目なんか悪くないし、メガネフェチでもない。どうにかしてくれこの勘違いを。

「あ、まさか・・・」

いきなりひらめいたような素振りをサンタは見せて、口笛を吹いた。

何で口笛？

・・・と思ったのもつかの間、最悪の光景が目に入った。

「うわあああ！」

サンタが増えた。

正座をしていたさっきのサンタの、斜め後ろに二人。更にそれらも正座している。

何者だよ・・・この人たちは・・・

というか本当にどこから入ってきたんだ？瞬間移動のように瞬時に現れるし・・・

「107号と118号さん、このエル君が欲しがってたのって何だっけ？」

しかも確認の為の呼び出しですか。しかも号数からしてサンタは相当な量がいるようですね。

そして、あまり間をおかずに、107と指差された左後ろのサンタが言った。

「メガネじゃなかったっけ？」

更に、後押しをするように118サンタが言う。

「メガネでしょう」

そして最初の正座していたサンタは、手をポンと打って、

「そうですね。エル君はやっぱりメガネですよね」

納得した。

・・・

・・・

ああ、そうか。僕が欲しがってたのってメガネなんだね。

「ではどうぞ、メガネです」

「・・・」

貰っておこう。

「ええと、ありがとうございます」

そして僕は、悪趣味相当のめがねを貰った。正直いらぬ。

「では、受け取ってくれてありがとう、エル君。では私たちの存在は忘れてくれるかな？」

という事は、運悪く出会ってしまった人は皆こういう忘れる催促をされるのか。

「・・・ええ」

嗚呼、なんだか色々嫌になってきた。

「では、御休み」

・・・やっと、やっとこれで現実に帰れるのか・・・

「おやすみなさい、サンタさん達」

僕は電気を消してベッドに潜り込んだ。そして目をつぶった。

次起きたときには現実でありますように。と、僕は願った。

そして、うとうととしたとき、サンタは言った。

「Good night (良い夜を)」

せめてメリークリスマスと言ってくれ。

寒い。

「布団から出たくない病」が毎朝のように発症したが、こもって

いても治らないので、決意して布団から出た。  
相変わらず寒い。

そういえば昨日の事は嘘だったのだろうか？

本当だったら嫌だが、本当だと言い張るだけの「証拠」が無いだけに、嘘だとか虚像だとか言い張れる。

・・・証拠？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

なんで僕、メガネかけてんだ？

(後書き)

ちなみに眼鏡はヒョウ柄でした。

びっくりサンタと眠れなかった夜

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3352b/>

---

びっくりサンタと眠れなかった夜

2009年2月16日18時10分発行